

## 白馬會の解散

吾人は白馬會の解散を以て、我明治藝術史上に於て、特筆すべき事項と見る。そは同會が去る二十九年創立以來我藝術界の發展に關して貢獻するところ尠からざりしが、今又時勢の推移に鑑み、斷然之を解散し、進んでは黨派的私心を棄て、公明正大に我藝術界全般の進歩の爲めに致し、退ては技術の研究、製作上個人の特徴を發揮せんとするは、洵に適當の處置なりと信ずるを以てなり。

黒田清輝氏は解散の理由を語つて曰く

『現今會員中には大分拔群の技倆を有する者も出來思想の變遷も累ねたので私共が當初期した事も着々有終の美果を收めた様である譬へば我々は油畫とは何麼なる者であるかと云ふ事を知しめる時代に起り畫家とは斯う云ふ者で展覽會は斯う云ふ風にして開く者と烏滸がましいが其等の標準を示す爲めに主義主張を以て此團體を續けて來た所が二三年以來私共の希望して來た公設展覽會も設立され私共の會員の大多數は外國で學で來た人々となり今は彼標準を示す必要も無くなつた加之世間の人にも油繪が好く解得され同時に鑑識力も一般に進めば製作品を見せる場所も立派に出來上つて居るされば此時に當つて各畫家の特長を示すには團體よりも個人的にする方が適當ではあるまいか元來畫家は個人の利益とか名譽とかは不問にして只管美術と云ふものに向つて一身を捧ぐ可きものであるが團體は兎角誤認され易いそれであるから終りは後進を誤り自分を誤る結果を生じはずまいか氣遣れる又私共が明るい時勢に適合した畫を作らねばならぬと云ふ主義は今では畫界の風潮となつて居て最早團體的研究を俟ないので白馬會が特に繼續して仕事をする必要はないのである故に爾來からは各志の赴く所に從つて驥足を伸す時代ではあるまいかと云ふのが今回解散するに至つ

た理由で有る』(國民)

同會創立者の一人にして、約十年前に退會したる岩村透男は局外者として其所感を述べて曰く

『白馬會創立當時の日本洋畫界は固より一般美術界の形勢は今日の狀態とは遙に異つてゐた。新歸朝の畫家が當時の狀態を憚らなく思ひ何等かの新運動を起さんと同志の者協議團結した之れが創立の直接原因である。然し當時の美術界に對する不満足と見るのは非常に狭い解釋で其の實は明治美術界引いては社會全體の有様に不満足で有たのだ。今日では美術が非常に社會一般から重ぜられ新聞雜誌上美術に關する記事を見ない事はない位であるが、創立當時の狀態は實にみぢめなもので新聞雜誌に其等の記事の現れる事は極めて稀であつた。當時の新歸朝者は西洋の生活と美術の親しい關係を直接眼にして來たのであるから我國に於ても如何にしてか美術を重要視させたい、生活問題の上に重く見させたいと言ふ望を抱たと云ふ切な要求に驅られたのだ。洋畫の眞目面な研究と當時存在した團體事業の仕方、言はば展覽會に對する不満足も原因であつたに相違ない、當時の展覽會と云へば極めて不整頓なものであつたが陳列法を改善したり佛國あたりの展覽會にあるが如き目錄を作つたり、從來の勸工場風の陳列を改めて美術品を樂しむ場所として設計しようとする企て等は我國では白馬會が先鞭をつけた事業である。十五年以前には斯かる有様であつたのが其後漸々發展して種々の美術團體も増して來るに四年前からは政府の事業として美術展覽會が催されると云ふ狀態になり、従つて社會よりは重視され日日の問題となるに至つたのは獨り白馬會のみの力でなく一般の進歩の致す所であるが公平な眼で見れば確に白馬會が全體の運動に寄與する所の少くなかつたと言ふ事は斷言して憚らない。斯く今日の洋畫界、のみならず全體の美術界の有様が創立當時の事情と異り、當時の人々が理想としてゐた所は多くの點に於て成就し、一段落着いたと言ふ形で之からは技術の研究、製作と云ふ事が益々個人的ならざるを得ないと同時に區々たる黨派の團結を旨とせず大局面から打算して運動せねばならぬと云ふ時代になつてゐる、斯る點に於て白馬會の人々が時勢を洞觀し解散と決したのは非常に時を得た事であり結構な事であると思ふ兎も角白馬會の事業は熟して落ちる時が來たのだ、目的は殆ど貫徹せられたのだ』(讀賣)

吾人は眞面目に且つ公平に、同會の成せる事業と今回の解散に關して考慮して、全然兩氏の説に同感を表するを以て、特に此に之を掲げて敢て多くを言はず。

唯だ吾人は飽くまでも、藝術界に黨派的私心の存在することを厭ふが故に、藝術上の競争は何處までも一騎打たるべきを信ずるが故に、將た又た眞の藝術品は、競争や努力の結果のみにあらずして、作家の感興の所望なることを信ずるが故に、近來一種の黨派の如く見做されつゝありし白馬會の解散を喜び、同時に同會の解散を促すに至りし時勢の進歩を賀することを言添へざるを得ず。

『美術新報』一〇六 明治四四年四月一日